

『春日権現靈驗記』

(検索=ワード 後鳥羽上皇)

石川 秀幸

大化改新(645)から日本の敗戦まで、我が国の政治の中枢を握り続けた藤原氏一族の、処世術の巧妙さの一端を『春日権現靈驗記』の文書から眺めてみる。

平治の乱で勝利した平清盛は、国の政治を握る摂政関白家の、藤原氏と蜜月関係を結んでいた。それは平清盛の持っていた軍事力と政治力が可能にさせた。

治承五年(1181)二月、清盛が没した。寿永二年(1183)になると、平家軍は北陸で木曾義仲軍に連敗した。勢いに乗る義仲軍が京都に攻め上って来るので、後白河法皇は鞍馬へ御幸された。七月廿五日に、清盛の三男の平宗盛以下一門は、幼い安徳天皇を奉じ、京都を後に西国へ遁れる。その行列に藤原基道は当然供奉する。基道は平清盛の娘婿、という親密な関係なのである。

以下が『春日権現靈驗記』

普賢寺摂政殿(藤原基通)ハ平家とひとつにおはしましかハ、」 寿永に宗盛公以下西におもむきし時おなしく、」 関西の道に同し立ちて、五条大宮迄まで行幸に供奉」 し給けるに、うしろより黄衣の神人招きたてまつると御」 覧して、御車をとゝむれは神人みす、又、御車をすすゝむ」 れいさきのことし、かくする事二三度になりたれば、春日」 大明神おほしめす様あるにこそとおほして、轅(ながえ)を北にして」 とゝまり給にけり、前後うちかこみたる武士のなかを、わ」 けて御車をやりかへされけるを、とかむる人なかりけるも」 ふしきの事になん、すへてこの殿ハ神慮にかなひ給けるにや、春日の寶前にてハ鹿御かほをねふりけり、又、」 世の中にひろまりたる垂迹の御躰の曼荼羅も、こ」 の御夢に拝ませ給たりけると申つたへたり、

解説

特別に親しかった平氏一族との決別の方法を、春日大明神だと罪を神様に擦りつける。藤原基道の罪ではないと、遁れ方の巧みさに感心する。

この絵物語は奈良の春日大社に秘蔵されたが今は皇室御物。『看聞御記』永享十年(1438)三月廿七日条に、延慶二年(1309)三月、左大臣西園寺公衡(きんひら)の立願で制作。詞書の筆者は前関白鷹司基忠と彼の息の摂政冬平・権大納言冬基・興福寺僧良信の四人。絵は絵所預右近大夫将監高階隆兼。製作の動機は氏長者鷹司冬平ではなくて西園寺公衡ということは、西園寺家の実力を示すという。鎌倉幕府と朝廷を結ぶ執奏家として、また、大覚寺・持明院両統天皇の外戚となっていた。公衡が失脚した嘉元三年(1305)以降、繁栄回復を願い絵巻制作をした。彼の父は前太政大臣入道実兼、豪壮で知られた人物である。

西園寺実兼を詳しく書いた女性がいる。後深草上皇のそば女の筆による『とはずがたり』である。恋の相手は性助法親王(有明の月)・鷹司兼平などの中に、西園寺実兼(雪の曙)と長い間、上皇へは内密に結ばれていたと、誇らしげに書く。彼女が赤子を産む(暫くして死ぬが)と後深草の子と偽る。二度目の女子を産むと知人に預け隠し通す。この太い神経の女性の名を「あかこ」「二条」と言った。彼女の曾祖父は『高倉院厳島御幸記』『高倉院昇霞記』、を書いた有名な文筆家の久我通親である。通親の娘が宝治の乱で死ぬ三浦泰村の二度目の妻である。最初の妻は北条泰時の娘だが出産後死ぬ。彼女が生きていれば宝治の乱は無かったと思う。『春日権現靈驗記』の絵物語には西園寺家の靈驗記も入るという。

『平家物語』には

『平家物語』三卷(岩波書店)に七月廿五日条に神人ではなくて「びんずら結ひたる童子の、御車の前つつと走り通るを御覧ずれば、彼の童子左の袂に、春の日という文字ぞ現れたる。春の日と書いてくかすが」と読めば、法相養護の春日大明神、大織冠の御末を護らせ給ひけりと、頼もしく思召すところに、件の童子の声とおぼしくて、いかにせん藤の末葉の枯れゆくをただ春の日に任せてや見ん 御供に候進藤左衛門尉高直を近う召して、くつらつら事のていを案ずるに、行幸離れども、御幸もならず。ゆく末頼もしからず思召すは如何に」と仰せければ、御牛飼に目を見合わせたり。やがて心得て、御車をやり返し、大宮のぼりに飛ぶが如くに仕る。北山の辺、知足院へ入らせ給ふ」と書いてある。